



ひときわ大きな樹だった。側の二階家の赤い屋根瓦に、影を落としている。その樹の頭頂部に、青い空を背景に咲き誇っている花卉が、どのように枝の先についているのか判然としなかったが、高く伸びた梢の先に、今を盛りに咲いている。しっとりとした芳香が褐色の幹を伝わって、滴るように落ちてくるのだろうか。

匂いがした。

実際は、そんな気がしただけだったのかもしれない。

私に、埒（らち）もない探索めいた行動をさせたのは、本当は匂いだったのかどうか。青く繁った生垣の向こうに、その樹が見えたとき、「間違いない」などと、思ってしまったのは、なぜなのだろう。何が「間違いない」のか。それとも、何かが「間違い」なのか……。

花は遥か高みに咲き誇っている。薄紫のにじみをともなった、濃緑の葉陰に垣間見える花々は、まるで蝶の群れのようなようだ。今にも一斉に飛び立つのではないか、そんな気配さえ感じられる。自分が、樹の上に安らぐ同じ蝶になったかのような戸惑いを覚えて、目当てもなく視線を漂わせた。

気がつかなかった。垣根の隙間から、二階家の屋根さえも覆うその大樹の下に、誰かが佇んでいる。

気がつかなかった。垣根の隙間から、二階家の屋根さえも覆うその大樹の下に、誰かが佇んでいる。

小さな体だ。結い上げた白い頭が見える。老女だろうか。夏の盛りに渋皮色の着物の襟をきっちり合わせて、かの樹を見上げていた。ついと上を向いた筋張った首筋にまだらの木漏れ日が落ちる。

「とうとう、切ることはなかったのだねえ」

つぶやいた声が、しんとした辺りを斜めに切り取って、私の耳に届く。

大枝の翳りの下に佇む老女は何を思っただろうか、自分の帯の辺りから、帯揚げだろうか、紫の絞りをか細い手がするすると引き出すと、思いがけずその布を放った。それはそこらの空気をはらませて、ゆるりと舞い上がると老女の足元から遠くに落ちた。

ほたりと落ちた紫の絞りに目が吸い寄せられて、一瞬視線が地面をなめた。

そこには、薄紫の花が幾つも零れ落ちていた。

はっと気付いて目を上げると、その老女の姿はどこにもなかった。

姉は屋移りに気乗りがしなかったのだろう、随分ぐずっていたのだが、とうとう義兄の説得に応じて、先日このマンションに越してきた。私の職場は小さな不動産屋だが、それなりに条件の良い物件を揃えているので、事務を担当している私の待遇も、まあいい部類か。

義兄が引っ越しの物件を探してほしいというので、それ相応の掘り出し物を私は探した。この屋移りは、姉の心情を和らげるためにと、義兄が心を砕いているのがよくわかったので、気乗りのしない姉を私も繰り返し説得した。確かにあの不幸な出来事は姉の心をひどく落ち込ませているのはわかっている。一粒種のある子が突然の病で亡くなって、もう、一年は過ぎているのだ。忘れるのは無理でも、人前ではそのふりくらいはしてもいい頃合だと私は思っていた。

「あらかた片付けは済んだみたいね」

私の声に「ええ」と答える声が背後から静かに響いた。姉は台所でお茶の用意をしているようだ。夏の日差しがベランダから斜めに差し込んで、カーテンの格子模様がフローリングに映りこんでいる。居間はようやく生活スペースが確保されたようだが、隣の和室はまだダンボールの箱たちがひしめいている。足元を気にしながら何気なく、和室に入り込むと、以前の姉の部屋にあったかどうか記憶にない桐の筆筒が目が行った。

白い箆笥だ。まだ真新しい匂いがする。

荷を解かれて据えられてはいても、和室のモスグリーンの壁から浮いたように、落ち着かない感じだ。引き出しの飾り引き手の細工は、まだ人の脂（あぶら）が染みていない。下から、順繰りにすいすいと引き出しを引いてみたが、まだ何も入ってはいなかった。だが、一番上の観音開きの戸を開けると、はらりと紫の絞り染めの布が零れ落ちた。箆笥の白い表面を引き出し伝いに、まるで清水が流れ落ちるように零れ落ちた紫。何の匂いなのか、しっとりとした優しい香を含んでいた。

「なあに、これ」

「ああ、それね……」

居間に茶器を運んで、ソファにゆっくり体を沈み込ませると姉は妙な具合に頬を引きつらせた。笑っているような、泣いているような、どちらともつかないそんな顔だった。

「それはね、ちょっと不思議なのよ」

「先日ね、所用があって遠出したんだけど、金沢」

「ああ、義兄さんの、親戚の？」

「ええ、その帰りに大きなお屋敷があって。あちらの方はとても落ち着いた屋敷が連なっていて、とてもいい雰囲気街並みが続くでしょ、で、すこし散策のつもりで歩いてたのよね」

急須を傾げて煎茶を注ぎながら、姉は何か見えないものを伺うような仕草をした。話すことをためらっているのだろうか。私はその紫の絞りを手にして、すっかり聞き入る体勢で姉の前に座り込んだ。姉は薄く微笑むと、話し始めた。

「時間があったから。それで、ふらふらと歩いているといい匂いがして、・・・誘われたのね。どこのお宅かは知らないけれど、大きな樹が垣根越しに見えて、それで覗いてみたのよ」

姉は私の手元の絞りに視線を漂わせて、そっと湯飲みを口にあてた。

「この季節でしょ、大きな樹に綺麗な花がこんもりと咲いていて、紫の花なんだけど、それに見とれていたら、その下に女の人が出てね。その樹を見上げていたの」

紫。手元の絞りも紫だった。紫の花を咲かせる大きな樹といえば・・・、私の知識の底を意識がたゆたう。

「それって、もしかして桐かなあ。高い樹だったの？ それなら、この季節で樹にたくさんの紫の花って、桐の樹じゃないかしら。姉さん、桐の樹って見たことなかった？」

「そうなの？ とってもいい匂いがしてたわ。それでね、その下にお年寄りの、多分、おばあさんだと思うんだけど着物の人が立っていて、するするってその紫の絞りを解いて、ふわりと投げたのよ」

「これ、帯揚げか何かじゃない。とても上品な物ね。絞りの仕方はよくわからないけど、確か群雲紋かなあ。その人が投げ上げたのがこの絞りなの？」

私はその布を胸元に上げた。微かに匂う。柔らかな香りがした。

## 二の四

---

「そう。その絞りに見とれていたら、そのお年寄りがふっと消えてしまって、私、びっくりして、垣根の隙間から庭に入り込んでその絞りを拾ったのよ」

「ええ！ 姉さんが知らない家に入り込んだの？ まあ、驚いた、姉さんがねえ」

私は絞りを膝にして、すすと煎茶を啜りこんだ。いつも控えめで物静かな姉がそんな冒険をしたことに驚いていた。どれほどの大樹だったのだろう。どんな誘惑が姉をそそのかしたのだろう。

「ふふ、その時は何も考えてなかったのね。よその家だって意識もなかったのかもしれないわ。私、それで、どうしようかって悩んだんだけど、そのままにして置けなくて、その絞りを家の人に返そうと思ったんだけど……」

姉の視線がまた、絞りに留まった。白い手に湯飲みがちんまりと納まって動かない。

「どうしたの？」

「その家は空き家だったのよ。戸も窓も板が打ち付けられていて、とっても人が住んでいるように見えなかったのよね。それで仕方なく持ち帰ったというわけなの」

私は嘆息した。姉の冒険はこの紫の絞りに収束したのだ。手触りは極上だ。どんな人の手で織られて染められたものかはわからないが、なぜか繊細な人の手を感じられた。温もりがあった。

「そう、あの樹は桐だったの」

ぽつりと言葉を漏らすと、姉は視線をベランダの日差しの中へ落としこんでいた。

母はわたしが誕生した時に、庭に桐の苗木を植えた。昭和の初め頃の話だ。どこの地方もそうだとは思わないが、この辺りでは娘が誕生すると庭に桐の樹を植える。成長の早いこの樹木は二十年もすれば立派な枝ぶりになり、桐の家財に身を変えられるほどにしっかりと大きくなるのだ。

桐の樹は重宝なものだったらしい。

持参する花嫁道具の中に、この桐でこしらえた箆筒などは欠かせないものだったのだろう。どの親も娘の幸せを考えていたのだ。だが、母はなぜ、この樹を植えたのか。

なぜ、わたしを女として育てたのか、そのわたしには推し量れない気持ちに翻弄され、心は磨り減る墨のごとく疲弊した。

「お前は どうして聞き入れない、お前は娘を産んだんじゃない。洲（しゅう）はりっぱな男だ。なぜそれを受け入れようとはしないんだ」

母をなじる父の怒声がことあるごとに家に響いた。総領として生を受けて家を受け継ぐ男が生まれたことを父は喜んでいたのだが、母はそれを頑として受け入れなかった。わたしに赤い服を着せ、長い髪を編み、わたしを娘として育てた。わたしはそれを受け入れるしかなかった。

父の声に耳を傾ければ男だが、それは忘れた頃に確認する程度に間が空いた出来事だった。父はこの家になかなか足を向けない。仕事が忙しいのか、家があるのを忘れたのか、それとも別に家があったのか、今でははっきりしないことだ。



母は何に苦しんで何を憎悪していたのか。

「洲、この家を離れるときは、お前がお嫁入りの時だわね。それまでは母さんと一緒よ。いつまでも一緒にいたいけど、それは無理。お前はお嫁に行かなきゃならない時がくるもの。でもね、いいの。それはお前の幸せだもの。この桐の樹が大きくなって、大木になって、母さんはその樹でお前の箆笥を作ってやるからね。きっと、幸せになれるよ」

母の声はいつまでも繰り返され、擦り切れた呪いのように耳の奥に残った。幼い日々、わたしは自分が女でも男でもないような気がしていた。父の声は私を男に引き戻すが、それはつかの間だったのだから。次第に父の足は、家からも母からもわたしからも遠のいて、わたしは女であることに慣れた。

わたしは思春期になっても柔らかな体でいた。ごつごつとした体の成長は訪れず、声も高い声のままだった。女として学校にも通い、女として人と接しても誰も疑うものはいなかった。ただ、父の声がわたしの長い髪を曳きちぎらんばかりに響いた夜は、恐ろしかった。

「洲、お前は男だ。男なんだ。どうしてお前はそれに気がつかないんだ。俺は男が欲しかった。俺の跡を継ぐものが欲しかった。なぜ、お前は女でいるんだ」

母の言うことが本当なのか、父の言うことが本当なのか。両親の諍いの中心にわたしがいた。おろおろとどちらにも与（くみ）する事ができず、どちらの側にも身を置けなかった。母は枝垂れた哀れな目を向けて私を見る。父は燃えた鋼の眼（まなこ）でわたしを射た。

どうしてわたしに判別がつくだろう。胸の膨らみはわたしを女といい、股間の頼りなげな部分はわたしを男と言う。わたしの体は、どちらも得ていたのだから。

わたしの体は・・・。

日差しが翳って、心地よい風が吹いてきていた。もう、まだるい夏の季節は終わりだろうか。夕方の涼しげな透き通った時間がようやく傾いた日の中にあった。姉は紫の絞りを私の膝から取ると、滑らかな布の手触りを確かめるように紫に手を染めた。

「もう、忘れたら」と言うのが難しくて、私はなかなか口にできなかった。

姉の最初の子供として生を預かったシュウは先天性の病があった。

半陰陽と言うのだろうか。

はっきりしたことわからないけれど、かなり稀な奇形だったという。真性の半陰陽というらしい。人間以外にはけっこう雌雄同体というのがあるそうだけれど、カタツムリやミミズと一緒にいるのも、遣る瀬無かった。

シュウの体の生殖器はどちらかということ、男の子よりに見えた。

奇形だったからだろうか、虚弱な体を抱えていた。せっかく生を受けたというのに、健やかに育つことはできなかった。乳飲み子の頃から入退院を繰り返して、闘病生活の末、三歳の誕生日を迎えることができなかった。

「姉さん」

「何？」

「シュウちゃんのこと」

「うん」

「辛い、わかるけど。先生も長く生きられないって、そう言っていたし。忘れて欲しいとは思わないけど、姉さん、もう……」

言葉を選ぶつもりでも、なかなかそうはいかない。うまく言うことができない。姉の苦しみは私の苦しみでもあるのだから。

「そうね。もう忘れなきゃならないのかもしれないけど」

姉の視線がはるか遠くに彷徨うのを、私は止められない。慈しんで育てようとしたその子はもう、この世の人ではないのだから。

「忘れてなんて、私は言わない。でもね。でも。もう苦しんで欲しくないのよ」

こんな言葉に力があるのなら、いくらでも言おう。姉をこの悲哀の深みから救い出せるなら、小石のような言葉を幾つも幾つも積み重ねて、時間をすごそうと思った。

「うん」

静かに微笑み頷いた姉。姉は何を思い浮かべているのだろうか。

あの紫の花だろうか。

ふっと身に纏いつくような仄かな香りが、紫の絞りから発しているのを私は感じていた。

「大叔母様？」

私は、その老女が、先日お食い初めの、ももか祝いの折、養い親を務めていただいた遠縁の大叔母に、よく似ていることに気がついた。大叔母といっても、本来の大叔母というのではないらしい。かなりの高齢でありながら、聡明でかくしゃくとしているということで、病弱なシュウが少しでも彼女の健やかさにあやかることができればと、姑がぜひ養い親にと頼んだという。

私は駆け寄って紫の絞りを拾い上げ、老女の顔を覗き込んだ。

「おや、まあ。こんなところであなたに会うのは、やっぱりご縁があるのでしょうかねえ。ここはわたしの実家なのですが、もう、誰も住む人もなく、この樹ばかりが残されていてねえ」

「桐の樹ですか？」

「ええ、私が生まれた年に植えられたものです。まあ、切ることもなく今まで私とともに生きてきたのですが。誰の役にもたたないのでは、もったいないことだわね」

大叔母は、白い頭をゆっくり仰向けると、遙か樹上の紫の花々を見遣った。やっぱり、香りが降りてくる。

「いい、匂いですね」

「気がつきましたか？ 普通、あまりに高いところに花があるので、落花して初めてその馥郁（ふくいく）たる高貴な香りに気づく……といわれるのですよ」

大叔母は、桐の幹を皺のたたまれた手で、数回なでてほっと息を吐いた。八十歳を幾つか越えたお年だと伺っていたが、ひとりで歩きまわれるほどにお元気なのだろう。

「私も、もう長くはありませんから、この木はシュウちゃんに譲りましょうかね」

「え。」

お元気でいいなと、思っていた虚を衝かれて、私は言葉が続かない。

「この木で箆笥をひと棹（さお）造らせましょう。どうして、と、あなたはおもうでしょうね。それには、ちゃんと訳があるのです。今では、ほとんどの人が知らない事実をお教えしましょうね。実はね、私は男だったんですよ」

こう、口火を切って、大叔母は自分の生い立ちを語ってくれた。今よりも昔であったからか、今もそうなのか、「ふたなり」で生まれてしまったものの苦境と苦悩の物語。

「わたしは、今でこそこうしたおばあさんですけど、何十年も自分が女なのか男なのかわからずに過ごしたもんだから、とうとう結婚もできませんでした。私の名前は「くに」と聞いたでしょう？ でも、ね。「洲」という漢字を書いて、父は『しゅう』と命名したのよ。もちろん、くに、とも読めるけれど。ふ、ふ、ふ」

大叔母は空中に指を動かして、「洲」と書いて見せた。「おくに」大叔母様の本名はシュウと同じ読みだったのか。

「だから、きっと、こうして私がシュウちゃんに会ったことは意味があるのでしょう。あなたに会ったのにも、意味があるんですよ。私はちゃんとこの年まで生きてきました。そして、とても、今は幸せなのです。辛い時期はあったけれど、今はね」

大叔母は、小さな手でそっと包み込むように紫に染まった私の手をとった。

「ありがとう、ございます。大叔母様」

私は、小さな老女の頭の位置まで背を丸めて、何度も何度も頭を下げた。こぼれた涙は紫の絞りに、つぶてのような染みを作ったけれど、かまわず泣いていた。

大叔母様の秘密を言うわけにはいかない。けれど、あの桐の花の下で出会ったことを誰かに言いたくてたまらなくなってしまった。もう三年以上も前のことが、紫の帯揚げを機に急に思い出されて、まるで最近の出来事だったように話してしまって、妹には悪戯なことをしてしまった。

シュウが居なくなってから悲しみばかりを見続けていたような気がする。

でも紫の絞りを見せられたとき、あの大叔母様の声がしたような気がした。

そして、「今は幸せ」いつかそう言えるようになりたいと思った。

そう言えるときまで、シュウと大叔母様の思い出とともに、あの桐の箆笥と紫の絞りは私の手元に在り続けるだろう。

〈終〉